

今更に『山形光弘詩集』に驚く。昭和五十二年刊の豪華な遺稿詩集である。いっどこで購入したのだろう。蔵書印があり、古書店であることに間違いはないが。外箱の底にくつついて、詩集を折りたたむように扉で包む函付である。背表紙周辺は布張りで、表紙は紺と薄緑色の混沌世界に青と白線の幾何学的デザインが沿い実にモダンに感じる。いかにも荘重な詩集といった感じである。

山形光弘の詩や文章は時々詩誌などで拝見するに過ぎなかったが、若い時に泉谷、内海、高木三人の次に、詩的感性の表出の手さで感嘆していた詩人だった。音楽や絵画にも造詣が深いことで魅了されていた。

山形は昭和十五年に弘前市富田町一丁目に生まれる。青森県近代文学館のホームページ資料では、現平川市の大光寺生まれとなっているが。いずれにせよ、平賀町立小和森小卒で、弘大附中、文芸部に属した弘前高校を経て三十八年弘前大学文理学部文学科を卒業。国文学専攻であり、文芸クラブ「ゼフェルス会」をつくっている。上京し旺文社に入社するも、翌年早々退職し四月から弘前の四中に勤務し、以後弘前南高校や中央高校に勤務。父も教師であった。

昭和四十年に県詩人協会に入会し、四十五年に詩誌「ふらんば」の同人となり、その創刊号に代表作となった長詩「砂子瀬」を発表。四十七年に県詩人連盟に入会。そして四十九年に詩誌「弘前詩人」の同人となるも、四度に亘って入退院を繰り返し五十二年三月に三十六歳で心不全にて逝去。

本詩集は没後、『弘前詩人』の同人を中心とした六名（工藤武四、斎藤春彦、茂田篤、獺不次男、南六郎、蘭繁之）が編集委員となって刊行された。長めの詩三十編と一行詩二十四編、および「現代詩の風土と伝統——隠者文学と現代詩——」「詩と風土」の評論から成る。

代表作とされる「砂子瀬」は、五部からなる長詩である。南六郎の「あとがき」によると、「熱烈に汚れなき風土を愛し、近代文明に次々と圧殺されてゆく風土に対して」書かれたもので、「亡びゆく土俗性をことばに残して置きたいとの願望」によって残されたものであるという。

最初に森山泰太郎氏「砂子瀬物語」から散文六行が引用されている。砂子瀬部落は、村を流れる岩木川の感慨、洪水調節、電源開発の多目的ダム建設最適地となり、ダムが完成して三十四年に貯水が始まり村の姿は没する。

以下は百行に及ぶ第一部の抜粋である。

砂子瀬

一

風景が汚れた上着を脱ぐ

優しい死者達が帰ってくる

泥の臭いがたちこめ ザワザワと

鳥肌立つ葦の茂みに

どろりとした眼球がある

女が一人立っている

葦の手はふるえ 空をつかみ

女の視線は重くダムに垂れる

一日の疲労の燃え残りの手袋を

かりそめの炎に染め 無数の魚のように

さざ波たつ向こう

金色の煙の中に

逆光の巨大な架橋の股間に

溺死者のような黄昏がぶらさがる

・・・・・・・・

水死した長男の遺骨は

箸で拾うと

多孔質の信じられないほどの

軽い重量でしかなかった

数個のこっけいなほど脆弱な組み合わせ

単純化された数式が

複雑な表情を衣裳する

ダムは神々の森と丘陵にうがたれた

ひしやげた眼

そこに傷だらけの風景が溜る

・・・・・・・・

湖底の村がある

以上最初の三十四行からだ、序章的ながら既にドラマティックである。小生には部分的に理解不十分な詩行も多いが、ダムに埋もれた部落の悲痛がいまだに響いてくる。

最初の一行「風景が汚れた上着を脱ぐ」はすこぶる文学的表現に感ずる。そして「優しい死者達が帰ってくる」と物語が始まり、手法の上手さを感じる。ひとり女が葦の茂み立ち、ダムの「逆光の巨大な架橋の股間に溺死者のような黄昏がぶらさがる」光景を眺める。本詩五部とも女あるいは女たちが象徴的な主人公とも感じられ、ダ

ムが女性の母胎にも重なっていく。

以下に、ダム建設後の追われた人々の生活、悲惨な運命が語られていく。

・・・・・・

父は生き埋め

出稼ぎ先の運河の工事で死んだ

長男は水死

オホーツクの霧の向こうで蟹が食った

飯場の夫からも　しばらく

薄っぺらな手紙と仕送りが届いたけれど　部落を出た男達は

霧の向こうへ消えていく

ダムの地方にひと時

退屈な煙が空を染め

墓地の傘花が雨に青ざめる

鉦を叩きぶつぶつと独り言のように

年とった女と子供ばかりの行列が続く

時に集団就職に失敗した少年が

疲れた渡り鳥のように

傷ついた風景を見つめていることもある

ひとつの道が通じることとは

人の奥にも道が通じるといふことだ
ダムの手が

巨大な時計をぶらさげる

秘境の時開か壊れ

淀んでいたものが流れ出す

異質なリズムに狼狽^{うろた}えた男達が

部落を踊るようにとび出していく

・・・・・・

マタギの部落が出稼ぎの部落になり

炭焼きがまに鳥が群れる

男達の居ない晩は味噌汁は要らない

焼き肴もいらない

昼だって晩だって冷たい飯に

露の漬物でも出してさ

たまにや孫と猫を相手にお酒を飲んでよ

酔って歌ってひいひい笑って

女同志で塩辛いほどの

涙も流してさ

・・・・・・

酔いどれた風が背をまるめて

吊り橋から湿った路地へ

埃を巻きあげる

硬い夜

吊るされた裸電球を

黒い手が圧しつぶす

湖底から移住した家々が

西部劇のセットのように山腹によりそう

それは昔気質の女には醜聞に見えた

風景は喪失し 風景は汚れていた

汚れない風景は 声のように

向こう岸にあった

女はそれをたたえるダムであった

この水没した砂子瀬の生まれ育ちに、先に述べた編集者の一人・工藤武四氏がいる。一九四三年生まれで弘前高校、岩手大学の美術科卒の優れた画家であり、高校の美術教員である。詩集「自転車のりのバラード」でも知られている。工藤氏は街の新聞に「目屋ダム、そして津軽ダムへ―郷愁・私の砂子瀬物語」を長期連載しておられた。この目屋ダムは二〇一七年に水没し、さらに大きな津軽ダムとなったが、ずっと砂子瀬に目を注いでこられた方である。山形

氏とは同業者であり、どこかで強い接点があったのだらうと思われる。

八十世帯五七二人が移転を余儀なくされた。多くは村内に留まり、「湖底から移住した家々が／西部劇のセットのように山腹によりそう」状態だった。その状況は砂子瀬小学校を始め小生にも分かる。小学校の何年生の時だったか目屋ダムにバス遠足をしており、その時の光景がまだ目に焼き付いている。大学生早々の時だったか油絵を描くのを教えてくれた高校一年生以来の親友Tとバス路線の終点である砂子瀬のバス停を下りて暗門の第一の滝を描きに行ったことなども思い出す。うち十二世帯六十九人は弘前に移住した。目屋ダムが操業し部落は湖底に沈んだ。さらに津軽ダムによって残った家々もすっかり消えることになる。西目屋側の最後のマタギ工藤兄弟も弘前に移住する。有難くも工藤氏には勤務先であった大学院の野外実習で少し知遇を得ることができた。

最後の砂子瀬第五部は標題が付き、次の通りである。

△ そして

しずまりかえった空には 以前から

ひとつの予感があった

しんとしていて

鳥の声だけがしゃがれて

紙のような空間を翳っていた
あたりはネガの風景に帰る
その予感はどうとう事実になった
ある朝

人々は立ちどまり
溜息ともあきらめとも言えない
鈍いまなざしを灰色の空に放りあげる
非常に遠い所を風が渡り
枯木の山を鳴らす
最初

その白い紙片のようなものは数少なく
まるで神のお告げのように
灰色の深さから 人々の掌に
もたらされた
やがてそれは数を増し
蚊柱のように空を点描し
たちまちたらずむ者の周囲を
埋めつくした
ひざまづくような人々の姿勢を
あざむき
ようしやなく吹雪き
鉾山をおおい 架橋をおおい

ダムの方を埋めつくしたが 間もなく

ゆつくりと人々は歩き出した
うつむき 重い足どりで
しかししっかりと踏みしめて
父から 祖父からの寡黙な口を
いっそう重く閉ざし
しっかりと腕を組んで

妻子が待つ所へ
よりそのような湖畔の家へ
かますを編む土間へ
炭焼きのかまをこねる所へ
いかだを流す伐採湯へ

鉾山へ
かつて知った冬の戦いの場へ
決意は露わにせず
しかししっかりと踏みしめて
やがてそこには

夏の祭りの頃のお道化た笑いさえ
浮かべて
炉ばたに煮える酒のおいに崩す あの
相好のような善良な笑みさえ
浮かべて――

信じようとする者には

信じられるのだ

労働のアカ切れの傷を共有しあう場所が

雪は寝苦しい人々の耳もとに吠える

風はとぐろをまいて雑木林に吠える

夜明けは軒の氷柱が窓まで伸びている

半年は雪に埋もれる

第五部の前半は象徴的な表現に思える。ダム建設の最初の知らせなのだろうか。不安は極度に達しているように感じられる。それだけに恐怖感も強い。ダム建設後の現実的な生活の不具合さよりも、こちらの不安の方がもっと深刻であり、それが本来的なものであり、それが実はずっとまだ続いていることを悟らされている思いになる。言葉少なく、選りすぐれた重要な言葉・表現だけによる、それだけに読み手が解釈を自らのものに深められることが可能な、詩の効果だろうか。

以下に、「砂子瀬」以外に特に感嘆した詩群のうち、詩的感性の豊かさをと同時に感じたものを三編取り上げたい。

七月の光

あなたにも

ぼくの心の街角にも

小さな飛沫の音をたてた 雨

夏

あじさいの花にも

ぬれた石とひとつひとつのその影も

あなたの言葉のようだ

あなたの影は

脱ぎ捨てられた上着のように

ぼくの庭に懸けられ

そこへそつと夏の手がやって来る

きつとコスモスの揺れている

空の駅のどこかで

郵便配達夫が途方にくれている

空に向けたぼくの手紙は宛名がなく

いつか まわりには

街路で縄とびをくりかえした少女も

空の黒板いっぱい落書きした

悪戯っ子もいない

砂にきざまれた ことば
砂にぬれつづけた うた
今も消えやらずに残る
ぼくらの夏の残骸を
ひとつひとつ 拾って歩こう
ひとりぼっちの ぼくらの
季節のために

遠いガラスのかげらのような
水平線のかがやき

海には少女の髪がおった

貝殻や潮鳴りが住んでいた

少女が海なのか

海が少女なのか

暗い紙芝居のような記憶の絵は
さだかでなくなる

でも ぼくらは

こんどこそいだきしめよう

ひとときは真夏の砂地に燃えた
赤い花のような心で

ぼくらの 空と海とを

誰のエピグラフだろう。詩人自身のものか。浜弁慶草は砂地に瑠璃色の花を咲かせ、マクロレンズで覗くと神秘的でもあり好きな花である。そうか、花の咲き始めの頃は、淡い紅色の花だったか。そういうえばそのような。山育ちの詩人であり海辺の高校勤務歴もないだけに、逆に詩人の細かな観察眼を感じる。誰かの引用であろうと、詩人自身が目に行っていることに変わりないであろう。

波がいつまでも心をゆすり続ける揺籃であることは分かるが、「海がやさしくわらっている」光景、いや情景はほとんど具体的にイメージできない。しかし、どこか脳が了解している。一枚のレコードとは海での大切な思い出なのであろう。それに触れる自らの心は再生する針なのだ。浜辺の少女の髪の匂い、貝殻や潮鳴り、実に詩情を漂わせる。ただ、一人ぼっちの「ぼくら」だから、詩人の少年時の思い出のような気がする。「遠いガラスのかげらのような／水平線のかがやき」も具体的にイメージできる。

山形は独身だったと思われる。略歴に婚姻が出て来ない。

次に上げる詩「遠い真夏は」は、海とか山とかの自然ではなく街中である。前半では、真夏の黒いアスファルト、下水臭い午後の川辺り、草いきれで息苦しくなるほど繁茂する雑草とどこか憂鬱気味である。いや、倦怠感だろうか。

遠い真夏は

遠い真夏は父のようにきつく

ぼくの背中をうちすえた

近い真夏に ぼくは裸足のままで

熱い舌を垂らした野犬のように

黒いアスファルトを歩いているだろう

下水臭い午後の川辺りに来て

ソツと雑草の茎をかむと

プシケみたいに口中あま酸っぱく夏が広がり

ぼくはおしのようになんにも言えなくなる

(そうだ その時おれも雑草だった……)

暗いまぶたの裏側でふるえている風景よ

展覧会の絵のように一枚々々めくると

そこだけトゲにでも触れたように 赤く

記憶の指先に血がにじむ

白い田舎道 日向葵の咲く垣根とか

友よ

ぼくらの腕に季節の牙の跡が

そして 注意深く傷を温める日を待とう

その眼に空か映るとき
唇に唱がふれるとき

豊かに 波のようにぼくをゆする

全身のことば

ぼくの原型をぶち壊した

不自然にゆがんだ挙動が きみたち

ユーグレナの眼点みたいなのいういしさを

傷つけてしまいたくないから

帰る日のために遠くならう

ぼくの穴蔵に飼育されたクル病の鳥

いつか見知らぬ街角で

汗ばんだナツパ服のように汚れた純潔が

ぼくの中でぼくを呼んでいる

「暗いまぶたの裏側でふるえている風景」という表現も拔群であろう。「展覧会の絵のように一枚々々めくると／そこだけトゲにでも触れたように 赤く／記憶の指先に血がにじむ」。記憶の指先は、ちよつと難解に感じられる。刺による指先の傷だから、すぐ傷痕になる安心感もあるが。

「全身のことば」と「ぼくの原型」は同等に違う。

ユーグレナはミドリムシのラテン語名のようだ。ラテン語の「*glena*」（美しい）と「*glena*」（眼点）によるという。ユーグレナの眼点は赤いという。ミドリムシの細胞先端にある眼点は光を感じる器官であり、光の方向を認識して移動するのに役立ち、かつ植物と動物の両方の性質を持つミドリムシの光合成と遊泳を支える重要な役割を果たしているといわれる。そのような眼点は、本詩において前述の垂らした野犬の熱い舌、指先の血とつながりがあるようにも感じられる。動植物同様、背中と裸足、倦怠と初々しさ、季節の牙と傷を温める日などの対比が止揚され、希望の光が差していまいか。

最終連は解釈に難しい。何処に、何に帰るのだろうか。近い夏から遠い夏へ、傷が温まった記憶の指先に、それとも自らの原型にだろうか。なのに、なぜ遠くなろうとするのか。そうする利点が分からない。酸っぱい夏に、ふるえている風景に、不自然にゆがんだ挙動にずっと現存在する必要性を自覚しながら。クル病は骨軟化症のことという。そのような鳥は何を象徴しているのだろうか。先に上げた詩「七月の光」に登場する鳥でもあろう。「破船から脱け出した少年の／夢が寄せられる／はばたく羽を持った／遠い 鳥」。それがずっとくる病に。それは、ゆらぎ不確定なままの先の現存在のことだろう。最後の二行は理解できる。自らの中の汚れた純潔が自分に呼びかけている。第一連から比喻を用いてのその具体的な描写なのかもしれない。

詩の最後として、詩集内では少し特異に思われる「ことば」を上

げて置きたい。簡潔で、一般的に多くの人に受け入れやすい詩型であろう。ヒューマニズムを深く感ずる。

ことば

アスファルトに落書きする子供に
空は大きな黒板
大人たちも恋人たちも孤独な言葉を
書いたことがある

きつとコスモスの咲く
空の駅のどこかで
郵便配達夫が途方に暮れている
空に向けたぼくの手紙には
宛名がなく
悲しみだけが
そつと封印されている

でもぼくらは信じていよう
明日も明後日も
きつと宛名のない手紙は

だれかが黙って解ってくれる

宛名のない手紙は世界中に広がり

世界中の人が優しく暖く

愛のテレパシーを結びあう

一行詩二十四編はどれも難解である。その中から、四編を上げてみる。一人勝手にイメージを膨らませ鑑賞しているが。

足跡を埋め続ける砂は過去からの手紙

ガラスの蝶となつて君の衿もとに死にたえる

優しい死者達が私の空洞を鳥となつてついでに

青い折紙の花が私の手袋に咲く お別れです

評論「現代詩の風土と伝統——隠者文学と現代詩——」について

以下、恣意的テーマで要約的に記述するが、まずそれまでの風土と伝統観について語っている。

「風土が人間性を支配する」

「風土とそこに根ざした因襲、習慣、社会体制、そして何よりも伝統というものが支配的と言わないまでも、それを個性化するうえに有力な要あつた因でことは、文学の上にも了解されている。ミモザの匂う南欧の強烈な日射と、ロシアのものの憂いトスカの霧は確

かに異質な文学をもたらした。」

そのような風土・伝統観は、わが国の戦後の詩壇では大正末期からのモダニズムの流れが主流となり、否定的価値観となる。桑原武夫の第二芸術論、四季派のリリシズムの系統の無力化、プロレタリア詩に触れて、詩における主知主義を論ずる。そしてサルバトーレ・ダリやT・S・エリオットの中に、伝統と絶縁した正統というものの存在の可能性を探っている。

さらに現代詩と近代詩の分岐点から、荒地派、職業詩人になれないこと、社会認識と自己存在の確認という方途などにより、現代詩と中世の隠者文学とが不思議に類似していくことを指摘している。ただし、隠者達は現生を否定し逃れた厭世家であつたが、絶対的な孤独者でもニヒリストでもない。そこには貴族政治の幻影が消え去つた浄土思想と老荘思想が渾然とした彼岸の風景を現出していた。一方現代詩には、彼岸や福音はない。時代全体のメカニズムを相手どりながら他者と自己を対峙させ他によつて自己を考える。進んでプロメテウスと忍苦の鎖を交換しようという氣でいる。隠者は観照を、現代詩は批評を求める。

そのような現代詩として村野四郎が取り上げられる。彼において抒情に対して主知主義が、詩の音楽性に対してイマジズムが主要なものとなつた。浄土思想のない村野にとって死後というものはなく、即物的である。だから現実の生に対する執着は強くなる。汎神論的な村野を分析する場合に、クラブントやリンゲルナッツの代わりに

芭蕉を、リルケやハイデッカーの代わりに老荘思想を持ち出してみようとする。村野は多摩川べりの武蔵野の土や草むらの中で育ち、山野を駆けずりまわっていた。

以上、本評論の論理性および文章力にまず感服する。地元では珍しい深く内容突いていく堅実な表現と論考であろうと。しかも恐らく三十代前半中にと恐ろしい。四十四年九月『弘前大学国語国文学』第二号に論文「待つ心のかたち——式内親王の家集について——」を発表し、「評論家としての稟質をしめした力作である。」と既に評されていたという。

評論「詩と風土」

主題の一つに、日本文学の伝統として、「もののあわれ」や「幽玄」の源氏物語を中心とした王朝文学と「まこと」の万葉集や古事記の対照性を述べては、どちらが日本人の魂にとってより根源的かと考察。また、国風文化と言えども、仏教や儒教、漢詩文といった大陸文化の教養がなければ成立し得なかったことも指摘。それはさらに大伴旅人にも老荘や仏教があることも。いずれにせよ「ますらおぶり」と「手弱女ぶり」。著者は結論的に、万葉集の方に裸の日本人の感情の原型が反映していると明言する。

さらに、江戸時代の鎖国において、国風文化ではなく超国粹主義とも言える国学が誕生したこと、貴族から武士の支配階級、そして庶民的文化について考察。万葉集の東歌と青森ねぶたの縄文性の考

察を加えている。東歌の人間の魂の崩壊の記録は、文学という形でしか記録しないのではないかと問い、南六郎や今尚志という詩人たちの地道な作には下北や王余魚沢といった過疎の村のドキュメンタリーというべきものがあることに触れている。

以上の二つの評論をみても、内容的に詩論ともいえる地元の詩人では数少ない堅固な文体であり、日本の古典を含む視野の広い本格的な評論に思われる。

これまで平川市の先達詩人と言えば、同じく大光寺出身の須々田龍介（一九〇一―六二）しか知らなかっただけに頼もしい限りである。

瀬川紀雄HP 〈シエカの風〉

2025.7.10